



細川雄次郎 (嘉永4年～大正4年)

嘉永4年5月4日、肥後天草郡富岡町に生まれる。明治8年、24歳の時に長崎に出て、池香穉に学ぶようになるまでの生活は、今までの杉亭二、呉文聡の様にはわからない。大体、今までの2人は、どちらかという早熟で、秀才タイプの人であった。ところが細川雄次郎の場合は、大器晩成で、努力家タイプであったようだ。

明治21年、37歳の時には、九州鉄道会社に入社し、九州地方の物産調査を行った。その後東京に出ると、麻布に住居を構えた。ここで多くの書生を置いて、「日本財政総覧(第一輯)」の著述にあたった。この「日本財政総覧」は、毎年的人口を基礎においてつくられたものである。その人口をソロバンに入れるのに、書生たちは「何千何百何十何人なり」とはよみ上げずに、「何千何百何十何円なり」と、朝から晩までよみ上げていたので、近所では余程の大金持が住んでいると思っただけらしい。ところが、雄次郎は中年の頃までひどい貧乏であったという。

61歳で小説「月山」を書き、芥川賞を受賞した作家、森敦の母堂が雄次郎の近い親戚にあたる。彼女が雄次郎を頼って上京し、麻布に住んでいた頃が、ちょうど雄次郎極貧の時代にあたる。その状態を、森敦はこう書いている。

「ぼくの母は日赤時代の従軍やなにかで、いくらか持っていた貯金をだんだん出させられ、もうこれ以上出させられたら学校にも行けなくなると思い、寝るときも、通帳を見つけられぬようにしていたと言っていた。(文壇意外史)」

明治25年5月、終に「日本財政総覧(第一輯)」は刊行された。この反響は大きく、雄次郎は、経済統計学者として一躍脚光をあびることになった。

翌26年、東京商業会議所の統計顧問となり、また、貨幣制度調査会および大蔵省の委嘱をうけて、財政経済の統計調査にあたることになった。

明治41年、「日本財政総覧(第二輯)」「日本財政年鑑」を発行し、明治39年度までの国庫財政に関する統計調査を完

了した。これによって、明治中期までの国庫財政に関する貴重な統計が完成したといわれる。

ついで「日本財政総覧(第三輯)」の調査に従事しながら、大正3年12月には、月刊「日本統計通信」を創刊したが、大正4年7月23日に没した。

今回をもって、統計人物史(明治編)は終わります。明治期に活躍した統計人はもっとたくさんいますし、明治を代表するに足る人物は他に星の数ほどいることでしょう。残念ながら、筆者の乏しい知識では稿がすすみませんので、御容赦ねがいます。

大正編、昭和編と稿がすすめば良いのですが、いつになったら実現できるやら。

最後に、統計人物史(明治編)を書くにあたって参考とさせていただいた資料名を記しますので、興味をお持ちの方は、お読みください。

大人名事典	平凡社
明治人物逸話辞典	東京堂出版
日本歴史人名辞典	名著刊行会
大正過去帳	東京美術
コンサイス人名事典	三省堂
文壇意外史	朝日新聞社



統計的童話

新「ヘンゼルとグレーテル」

昔々、人間が増えすぎて、大変な食料危機の時代がありました。ヘンゼルのお父さんとお母さんも、毎日毎日食べるものを探してあるきました。初めのうちは良かったのですが、そのうちに何も食べるものがなくなってしまう時がきました。そこで、お父さんとお母さんは、どうせ自分たちが作ったものだし、親の役に立つなら本人も本望だろうから、ヘンゼルを非常食料として食べてしまおうと決めました。

ガール・フレンドのグレーテルとデート中のヘンゼルは、たまたまこの相談を物陰で聞いてしまいました。そこで、食べられては大変と、2人で森の中に逃げこみました。夢中で歩いているうちに、道に迷ってしまいました。どうせ家に引き返すこともできないので、森の中で一夜をすごすことにしました。

翌日、2人はなおも森の奥へ奥へと進んでゆきました。すると森の空地になんと、1軒の家があるではありませんか。しかも家のまわりには、おいしそうなトマトやきゅうりなんか実った野菜畑があり、ニワトリもあそんでいるのです。2人はこれを見て、急におなかがすいてきました。そこで野菜畑にとびこむと、まっ赤なトマトや、みずみずしいきゅうりやらを、手当たり次第に食べてしまいました。もう何日も食べていなかったのです、その食べることに食べることに、もう畑にはほとんど残っていません。最後には、苗木まで引き抜いて食べ始めました。

突然、「こら、そんなに食べたらかかん！」と、大きな声ですると、家の中から、コワイおばあさんが鉄砲を持って飛び出してきました。そして、野菜畑の無残な有様を見てペタンと坐りこむと、オイオイ声を上げて泣き出しました。2人はもうビクビクして、おばあさんを見ているだけです。おばあさんは一頻り泣くと、2人をにらみつけ、鉄砲をつきつけました。2人はあわてて坐り直して、「おばあさん、私たちは何日も食べていなかったのです。ごめんなさい。

許してください。」と泣いて頼みました。おばあさんは少し考えてから、鉄砲の先で家の中に入るようにながしました。2人は本当はまだ食べたかったのですが、こわいので、手を上げたまま家の中に入りました。

だんろの中には、おいしそうなおいのする鍋がかけられています。おばあさんは、2人をテーブルにつけると、その鍋の中から何やら得体の知れないスープをよそって食べさせてくれました。熱いスープを、フーフー吹きながら食べている2人をじっと見つめながら、おばあさんはブツブツと一人言をいっています。2人がそれとなく聞いていますと、こんなことをいっています。「統計的にみれば、人口が増え続けていって、こういう食料危機の世の中になることなんかわかっておったのに……」そういえば、そんな話を昔の本で読んだことがあった、静止人口とか人口爆発とかいってたなあ、と2人は頭の片すみで思いました。でもそんなことを思い出すより、今は食べることの方が大事です。

夢中で食べている2人を見つめるおばあさんの眼が、キラリと光ったので、2人は思わずゾクッとしました。そして、おばあさんの一人言に前よりも注意を集中しました。すると、「この2人は、さっき野菜畑を荒らしてくれよった。それにこのまま2人を帰す訳にもいかん。こうなったら燻製にでもして、非常食料にしてくれよう」といっているではありませんか。ヘンゼルとグレーテルはびくくりしてしまいました。せっかく逃げてきたのにまた食べられてしまいそうです。2人はお互いに目くばせをすると、いきなりおばあさんに飛び掛かりました。そして鉄砲を奪い取って、ズドンと一発、おばあさんを殺してしまいました。

その後、2人はおばあさんの残した食料のおかげで、その家で仲良く暮らすことができました。やがて2人の間には、かわいい子供が何人も生まれました。その結果がどうなったのかは、誰も知りません。

(伊 藤)